

中央教育審議会 生涯学習分科会  
社会教育の在り方に関する分科会(第9回)



# 子ども会の可能性

公益社団法人全国子ども会連合会  
会長 美田 耕一郎

# 子ども会の始まり

## 〈「子ども会」結成の背景〉

第2次世界大戦後の社会の混乱（孤児、貧困、路上生活、若年労働、非行・・・）

## 〈「地域子ども会」の結成へ〉

- ・ 1946年10月 文部省「青少年不良化防止対策要綱」
  - ⇒ 住居地域を単位とした自主的青少年団体の育成と健全な娯楽、趣味、文化的教養の向上など
  - ⇒ 「『児童愛護班』結成活動に関する通達」
    - 教育者、民間篤志家、師範学校生徒等の有志によるお話し会、遊戯等を通じた校外指導など
- ・ 1947年3月 文部省「**父母と教師の会-PTA**」結成の呼びかけ  
**学校外各種事業奨励⇒地域子ども会の結成へ**
- ・ 1947年12月 児童公布
- ・ 1948年11月 厚生省「児童指導班結成及び運営要綱」
  - ⇒ 児童福祉司、児童委員等と連携し、子どもの遊びに対する指導を通じた社会性の訓練など

# 全国子ども会連合会の誕生



【1951年～1961年】

厚生省等主催「子どもレクリエーション・キャンプ指導者講習会」→「グループワーク講習会」

【1956年】

文部省主催、厚生省協賛「第5回全国児童文化会議」

「全日本子供会連絡事務局」設置を決定（事務局は東京都子供会連盟）

【1962年】

全日本子供会連盟主催「指導者実技研究集会」 ゲーム、ソング等の実技の専門的な研修

【1963年】

文部省主催「少年生活指導者研究集会」（以後名称を変えながら1970年まで継続）

参加者有志によって「全国少年団指導者連絡協議会」を結成

【1964年】

「全国少年団指導者連絡協議会」を発展解消し、「全国子ども会連合会」が設立

理念：「日本中の子ども達の成長と幸福のための子ども会」

初代会長：床次徳二／三代目会長：藤波孝生…国会議員が会長に就任

【1965年】

「全国子ども会連合会」が社団法人として認可

# 「子ども会」組織

単位子ども会

構成員：地域に住むすべての子どもと  
子ども会を支える育成会

※「10人前後の班を設けて小集団活動を進めることが最も大切」（子ども会用語集）

学校区

構成員：主に単位子ども会育成会（大人）  
事務局：育成会の代表者

市区町村

構成員：学校区子ども会の代表者（OB/OG含む）  
事務局：市区町村教育委員会が育成会の代表者

都道府県

構成員：市区町村子ども会の代表者  
事務局：子ども会関係者が務めることが多い  
※和歌山県・鹿児島県においては、県教育委員会が事務局を担う。

全国子ども会連合会

構成員：都道府県・政令指定都市子連の代表者  
事務局：常務理事・事務局次長  
事業担当3名／共済担当5名

# 「子ども会」の特色・強み

- ①子どもの会ではあるが、会員のきょうだいや地域の役員を含めて、  
0歳～100歳までの異年齢集団  
⇒ジュニア・リーダー（中学生・高校生相当）：約3万人  
⇒ユース・リーダー（高校生卒業生相当～30歳程度：全子連の定義）：約3800人  
※ただし、地域によってユース・リーダーの年齢幅は異なる
- ②「子どもの手による子ども会活動」  
（「会長挨拶」全国子ども会連合会HP [https://www.kodomo-kai.or.jp/greeting\\_r4-7/](https://www.kodomo-kai.or.jp/greeting_r4-7/)）
- ③子ども会は、大きく会員と育成者に分けられる。  
⇒育成者は子どもを持つ親に限定されず、「子どもを取り巻くすべての大人」と規定
- ④「生まれてはじめて属する地域コミュニティ」
- ⑤子ども会活動は、子どもたちにとって体験活動の場であり、居場所であり、気づきの場である。  
子ども会活動は、育成者たちにとって体験活動の場であり、居場所であり、気づきの場である。

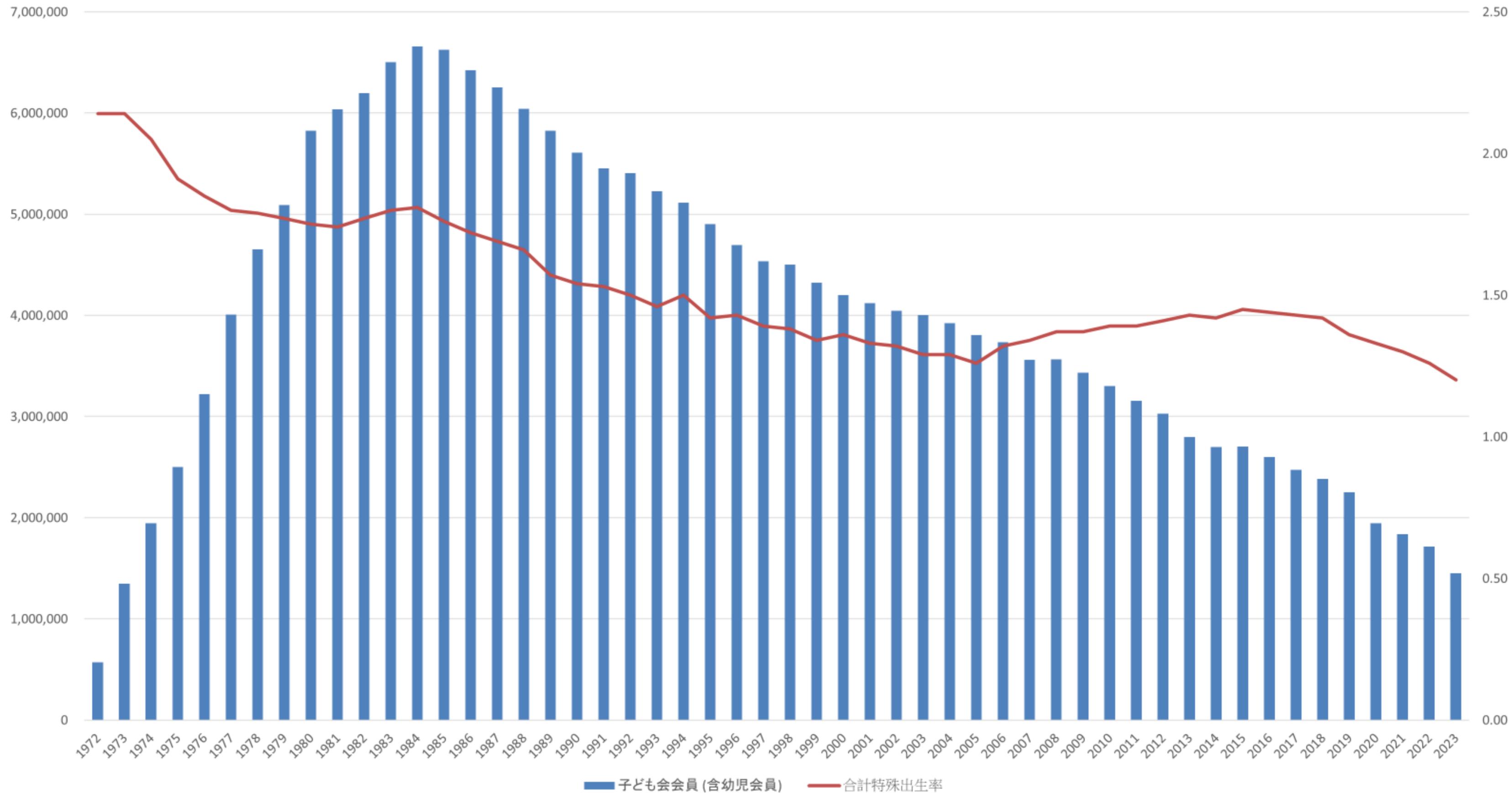
# 「子ども会」の弱み

- 地域に住む異年齢集団のため、  
子ども会活動や社会教育に対する理解がまばらである〈特色・強み①〉
- 現実には、行事に特化した活動が育成者や指導者によって実行され、  
子どもの手による活動が実現できていない  
〈特色・強み②・③・④〉
- 育成者や指導者の生涯学習の場となっていて、  
子どもたちの正しい体験活動の場になっていない  
〈特色・強み①・③・⑤〉
- 行政や学校、関係団体との関わり方が未熟〈特色・強み①・③・⑤〉

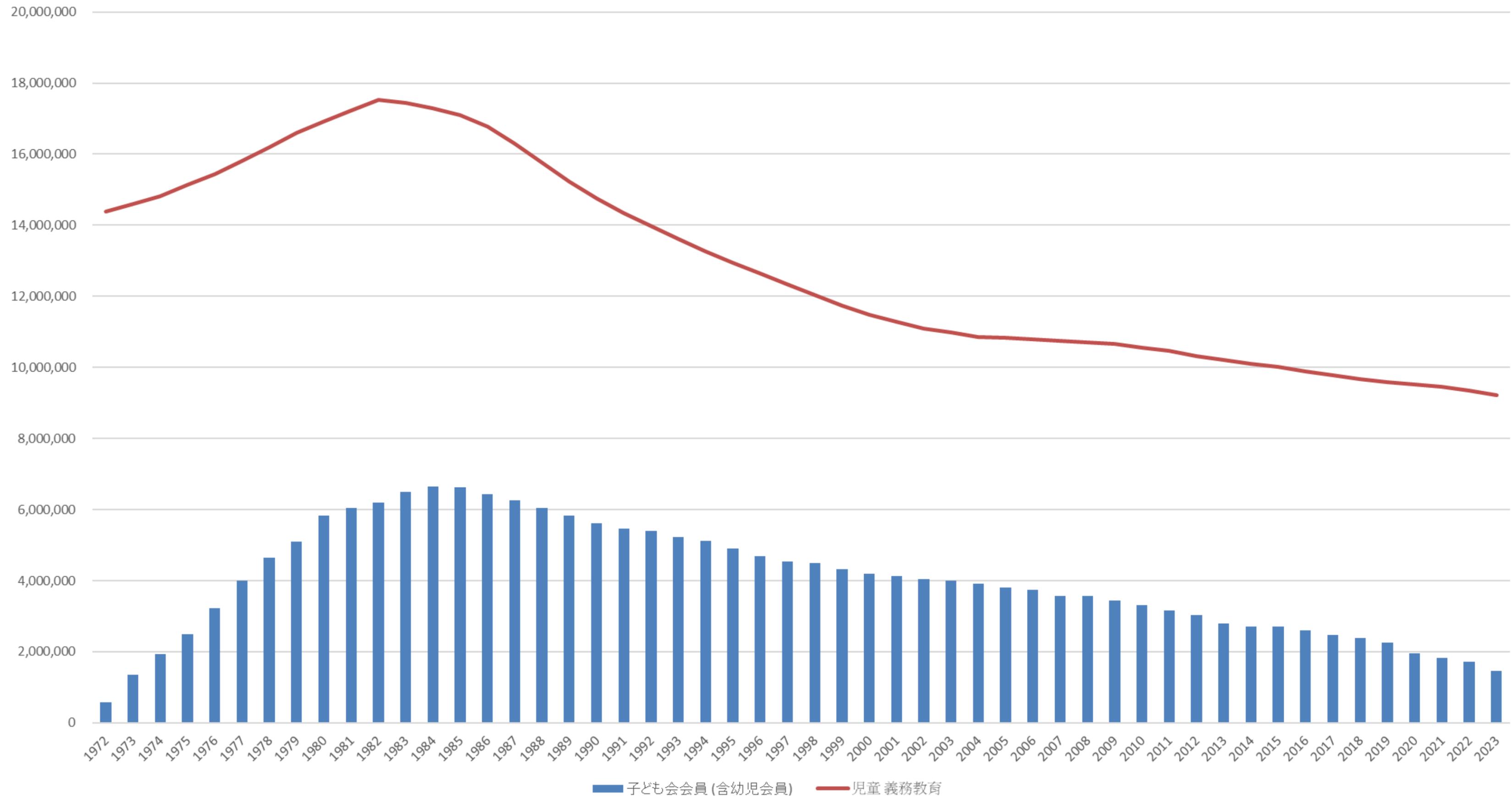
# 全国子ども会連合会の課題

- **会員数300万人問題**⇒未来委員会の設置
- 1年間の議論の結果・・・
- 全国子ども会連合会の目的「日本中の子ども達の成長と幸福のための子ども会」を、  
「日本中の子ども達の真の成長と幸福（しあわせ）の子ども会」へ2017年に変更
- 目標として「子どもの手による子ども会活動」の実現によって  
「真の成長と真の幸福」は達成できると考える
- つまり、単位子ども会を支援する都道府県子連や市区町村子連等の連合組織への支援が必要となる
- 連合組織の問題として、連合組織に属する意義が薄れている

全国の子ども会加入者数(子ども)と合計特殊出生率 (昭和47年～令和5年)



全国の子ども会加入者数(子ども) と児童数(昭和47年～令和5年)



# 「子ども会」役員からよく聞く声

---

- ①子ども会の必要性が分からない
- ②役員になると負担が大きい
- ③連合組織に入っても仕事が増えるだけ
- ④行政は何もしてくれない

⇒子ども会活動や生涯学習・社会教育の正しい"伝達者"がない

# いま、「子ども会」に必要なこと ～よく聞く声①・②・③の解決策～

- 「つながりづくり・地域づくり・ひとづくり」のリーダー
  - ⇒ 社会教育の必要性を理解して、
  - ⇒ 異年齢や異世代の多様な人々と協働し、
    - ⇒ 子ども会内や行政・学校、関係団体と調整ができ、
    - ⇒ 子ども達の真の成長と幸福を思考停止せずに追求できる人

※子ども会のことのみではなく、地域全体を考えて行動できる、  
子ども会のリーダーではなく、地域のリーダー

# いま、「子ども会」に必要なこと ～よく聞く声④の解決策～

## ●かつては・・・

- ⇒社会教育主事がほとんどの市町村教育委員会に置かれ、
  - ⇒子ども会や地域活動の必要性を理解し、
    - ⇒市町村教育委員会（行政）が子ども会連合組織の事務局を所掌し、
      - ⇒子ども会役員へ伴走支援をしていた

※子ども会を支援することは行政側にも、メリットがある  
(子どもの体験活動の推進、子どもの居場所づくり、地域コミュニティの活性化等)

## ●負担？負担感？

- ⇒鳥取県米子市での事例
  - 行政の協力により、かつての活動が簡単に取り戻せる

## いま、子ども会連合組織に必要なのは…

⇒高い専門性を持つ社会教育主事・地域での活動を支援する社会教育士

# いま、全子連が取り組んでいること

## •①社会教育の専門性を持った人材の輩出

- ⇒地域推進コーディネーター研修（大臣認定学修は令和7年度～実施）
- ⇒子どもの体験活動推進部会・推進研究会（各ブロック）
- ⇒ジュニア・リーダー研修会・ユース・リーダー研修会
- ⇒全国子ども会中央会議・研究大会／地区子ども会育成者研究協議会

## •②行政への要望

- ⇒都道府県知事・市区町村長、教育長、担当者への訪問  
行政・市町村子連・都道府県子連・全子連での4者懇談（令和7年6月末時点で約90か所訪問）

## •③子どもを取り巻く諸施策の学習・理解

- ⇒中央省庁担当者を招き、政策勉強会を実施（年4～5回）
- ⇒講演会・分科会のテーマ設定（育成研・中央会議の開催）

# 復活する子ども会？



## 地域ぐるみで育む「子ども会」 ピークの3分の1近くまで激減

2024年8月24日 20時47分

盆踊りやラジオ体操など、さまざまな活動を通じて地域ぐるみで子どもを育む「子ども

## 一度は解散…復活した地域も

一度は解散した子ども会を復活させた地域もあります。大分県別府市亀川の子ども会は、2015年に運営の担い手不足などを理由に解散しました。

しかし、小学生の子どもがいる保護者を中心に、子どもどうしの交流や体験活動の機会を求める声だけではなく、地域のつながりの希薄化を懸念する声も相次いだため、おととしに子ども会が復活しました。



NHKニュース（2024年8月24日）

(<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240824/k10014558141000.html>)

最終閲覧：2025年7月8日

## まとめ

- 子ども会は、「子どもの手による子ども会活動」を通じて「真の成長」や生涯学習・社会教育の充実、子育て支援、子ども・若者の居場所づくり、地域コミュニティの活性化に貢献できる団体です。
- 近年では、急激な社会情勢の変化、少子化、コロナ禍等の影響を大きく受け、子ども会の会員数は年々減少の一途をたどっていますが、決して弱小化することなく、「生まれてはじめて属する地域コミュニティ」として活動を続けています。
- 子ども会連合組織もあり方を見直し続けながら、子ども会の支援を行っています。
- 行政や学校、地域と相互に理解し合いながら協働し、日本最大の青少年教育団体として、これからも子どもたちの真の成長と幸福の実現を追求し続けてまいります。